

翻 訳

ヴィルヘルム・ショーフ『ベルリンにおけるグリム兄弟』— (試訳) (2)

Wilhelm Schoof, Die Brüder Grimm in Berlin, Berlin, 1964.

稲 福 日出夫

はじめに

ベルリンにおけるグリム兄弟

ヤーコプとヴィルヘルム グリム、就任講義を行う

三月前期のベルリンにおける社交的な生活 (以上、前号)

「真夏の夜の夢」上演のためポツダムへ向かう臨時列車のなかで (以下、本号)

ヴィルヘルム グリムの誕生日への学生の集い

妨害された誕生祝賀パーティー

「真夏の夜の夢」上演のためポツダムへ向かう臨時列車のなかで

1843年10月30日、ヴィルヘルム グリムはゲッティンゲンにいる友人のフーゴー教授に、ポツダムの新宮殿でルートヴィッヒ ティーク (Ludwig Tieck) によって企画されたシェイクスピアの「真夏の夜の夢」の上演の様子を詳しく書き送っている。ところで、その劇に作曲したのはフェリックス メンデルスゾーン-バーソルディ (Felix Mendelssohn-Bartholdy) であった。

「去る14日に『真夏の夜の夢』が上演されたのでありますが、それは皆が口にするように、或る大きな出来事でありました。私たちにとって、それは若干の緊張を伴わずには済まされないものでありました。私は、貴殿もおそらく御存知のギリシア人の仲間たちと行ったのであります。列車の特別車室を利用したのですが、5時に開演ということでしたので、さっそく3時には出発しました。私たちがポツダム駅に着いたときにはすでに、つじ馬車は一台も待機していませんでした。また、最良

の宿泊施設の前にも馬車は見つかりませんでした。そういった事情で、私たちは、新宮殿まで歩いて行かざるを得ませんでした。ただ幸運なことに天候は穏やかで、サンスーシーを通り抜ける道のりは、あちらこちら芝生のように夏の名残りを思わせる緑が映えていたいへん気持のよいものでした。しかし、私はけっして健脚ではありませんので、5時に辿り着いたときには、へとへとになってしまいました。しかし、開演は6時に変更されました。というのも大公の後継人アルブレヒトに敬意を表しての豪華な晩餐が行われていたからであります。30分前に私たちは劇場に入りました。いつもより多くの人々が集まっているように思われました。宮廷の人々が入って来る前に、ティークが入場してきました。彼の席は、宮廷の人々のために区切られた半円のなかに準備されていました。その背後には同じく半円形ですりばち型につくられた聴衆のための客席があり、劇場は歓声に包まれました。ティークは、身をかがめて歩き、やっとの思いで階段を二三段、よじ登っていきましました。もし数人の士官たちが彼に手を差し伸べ支え上げることがなかったならば、彼は、なかなか自分の座席にたどりつくことができなかつたであらうでしょう。彼の眼は、うれしさに満ち溢れていました。いつの日かシェイクスピアの劇を省略することなく原作のまま上演したいという長い間胸に秘めていた願いが、やっと叶えられたからであらうでしょう。6時に宮廷の人々が長い列をなして現われました。彼らは、まさに今晚の主客であるティークのために、いつになくきらびやかに着飾っておりました。王妃は宝石をちりばめておりました。M- シュヴェーリン (M- Schwerin) の大公妃、オランダのフリードリッヒ王女、国王の姉妹もそのように華やかでした。H- ダルムシュタット (H- Darmstadt) の世襲大公もそこに列席しておりました。彼は首筋の太い強靱な人物であります。国王は、劇場に入ってくる際、いつものように観衆に向かって親しみを込めて挨拶しておられました。その後ろ姿を観客は、何度かオペラグラスで眺めておりました。私は、国王の横に座っておられた世襲大公の姿をはっきりと見ることができました。というのも、その席は、ちょうど真向かいになっていたからであります。国王は金髪で顔色が生き生きとしており、きびきびと才気に満ちた表情でもって、時折あたりを見回しておりました。世襲大公はじっと静かにしており、というよりむしろ顔色があまりすぐれてなく黒っぽい髪をしておりました。表情は冴えず、決して思慮がないわけではない

が、とくに秀でているというわけでもなく、せいぜい如才ないといったところです。襟周りに金糸を織り込んだ刺繍がほどこされた淡い灰色のオーストリア風の服装は、暗青色のプロイセン風の服装と比べ際立っておりました。ヴェヒター氏(Hr. v. Wächter)は晩餐会に招待されていたのでありますが、彼は宮廷の随員として座しておりました。私の背後の席には、或る婦人が、決して妙齡の女性というわけではありませんが、高価なダイヤモンドの飾り紐で豪華に着飾って、座している世襲大公のことをしきりに聞いたがっておりました…。9時半頃に演奏会は終了しました。終了後の人混みはすごいものでした。一台の馬車をひろうことさえ考えられませんでした。結局、私たちはまたもや歩いて戻らなければならませんでした。が、月がたいへん美しく輝いていました。私は急ぎ足で歩むことができませんでしたので、先を往く大勢の人々から二三の友人とともに遅れてしまいました。私たちは、薄暗い闇に包まれた公園のなかで道に迷ってしまいました。正しい方角を指示されても、結局、時間が無駄に経過するだけでした。もし一台のつじ馬車と幸運にも出会わなかったとしたら、私たちはおそらく一晩中道迷いをしてそこに止まらざるを得なかったことでしょう。私たちは、ハーフェル川(Havel)の向こう岸にある駅の最終時刻にどうにか間に合いました。しかし何か口に入れる時間はもはやありませんでした。私は空腹に耐えることができませんでした。そこで、友人が車中で私に乾燥したビスケットを差し出してくれました。11時45分頃、私はやっと自宅に到着しました。私の妻は、私がなにか食べるものを探していることに気づき、ベッドから起き上がり、アルコールランプ用加熱台を用いてミルクスープを作ってくれました。このささやかだが本当の食べ物でもって、精神的に十分に満足した晩が締めくくられました。深夜の1時に、私は寢床に就きました。」

グリム兄弟が親しい人たちへの書簡の中で、落ち着いて仕事にかかる時間がほとんど持てないとこぼしている、ということをしばしば耳にする。というのは、彼ら兄弟は、社会的な義務を果たすため頻繁に出かけなければならなかったのであったが、同時にその一方で、自宅にも客がひっきりなしに訪れるからであった。そうした訪問客によって平静な時間が妨げられるのであった。「日中は用務に追われてあわただしく時間が過ぎていきます。」1841年6月30日、つまり彼らがベルリンに引越してまだ3カ月しか経ってない頃、ヤーコブはこう記している。「そして晩には、

私はその時刻をひとりになって手紙をしたためるのが昔からの習慣でありましたが、訪問客が絶えずやって来ます。もちろん、当初は変わらざるを得ないところもありましたが、しかし今では、然るべき方策が見当たらない有様です。」

グリム兄弟は、ベルリン大学の数人の同僚との間で、兄弟のカッセルやゲッティンゲン時代から活発な親愛に満ちた交流が続いていた。彼ら同僚のなかには、かつてのマールブルクでの恩師サヴィニー教授がいるし、またラッハマン教授もいる。科学アカデミーによって編集された親愛の情に満ちたラッハマンの書簡集は彼らの長年にわたる交流の証言記録である。生来独身男であったラッハマンは、毎日のようにグリム宅に出入りしていた。同時に、古ドイツ文学に関係する文献を幅広く蒐集している知識人のモイゼバッハも、しばしば歓迎される客であった。さらに、かつての交友関係も復活した。たとえば、グリム兄弟をベルリンへ招聘する件で大いに尽力したベッティーナフォンアルニム、アンナフォンアルンスヴァルト旧姓フォンハクストハウゼン(Anna von Arnswaldt geb. von Haxthausen)、文化大臣アイヒホルン、およびその他の人々。これら旧知の友人に加えてさらに、ベルリンの地で新たに親交を結んだ多くの人々もやって来た。たとえば、哲学者のシェリング、歴史家のランケ、考古学者のゲルハルト、法律家のリヒトホーフエン、美術史家のコルネリウス等々。ここでは刺激に満ちた豊かな精神的交流が兄弟の眼前に現れた。知的精神の共同体(Geistesgemeinschaft)、それこそ兄弟がカッセルで望んでも叶えられなかったものであり、またゲッティンゲンにおいても、ここベルリンで経験するようなことのなかったものである。

画家で銅版画師である弟のルートヴィヒ・グリムが、1843年に兄弟のもとを訪ねてきた。ヴィルヘルムはカッセルに住んでいるその弟に、兄弟のベルリンでの生活の様子をしばしば書き送っていた。ルートヴィヒの滞在したその年の7月16日から8月4日までのあいだ、グリム兄弟の自宅では毎日入れ替わり立ち替わり人々が訪ねて来て交流が行われた。そうした日々の様子をみて、グリム兄弟の時間と労力のかかなりの部分がそうした交際に割かれているということをルートヴィヒは了解した。親しい友人たちが毎日やって来た。とりわけ頻繁に姿を見せたのがベッティーナであり、彼女は三人の娘、マクシミリアーネ、アルムガルトそれにギゼラを連れてきた。さらにはハッセンプフルーク家の人々(グリム兄弟の義兄弟)、サヴィニー

家、フォンツィトヴィック 旧姓フォンハクストハウゼン夫人 (アネッテ フォンドローステ・ヒュールスホーフのおば)などが訪ねてきた。ほとんど毎日のようにルートヴィヒ・グリムは、ヤーコプ、ヴィルヘルムと彼の妻ドルトヒエンとともに華やかな夜会に招待された。たとえば、当時大臣であったサヴィニ一家に呼ばれたり、文化大臣アイヒホルンの息子とシェリングの娘との結婚式へ出席したり、あるいはコルネーリウス教授や多くの芸術家や学者たちから招かれた。ルートヴィヒ・グリムへの敬意を表すといった意味がこのような招待に含まれてはいただろうが、それでもグリム兄弟の日常とそれほど多くの違いはなかったはずである。そこに不可解な点がある。つまり、グリム兄弟は、このような多方面にわたる交際を続けながら、彼らの息の長い大がかりな研究、とりわけドイツ語辞典の作成という大事業のための時間とエネルギーをどのように作りだしたのであろうか。50年代に、つまり辞典を作成する重みがいよいよ彼らを圧迫し始めたとき、グリム兄弟はこうした社会的な生活からほとんど身を引いたのであった。

ドイツ語辞典の作成という仕事は、時折、鉛の負荷のように重苦しくヴィルヘルムを圧迫した。そこで彼は、ため息まじりにカッセルにいる弟ルートヴィヒに、1852年6月26日、次のような手紙を書き送った。「印刷するというのがどのような圧迫感をひとに与え、締め付けるものなのか、君は知らないでしょう。校正用ゲラ刷りが届くとそれに手を入れ訂正しなければなりません。原稿が植字工を困らせ、あれこれ誤植があれば、それを訂正するのに3時間か4時間費やしてしまいます。私は毎日1時間15分ほど散歩に出ます。今年のティアガルテンはたいへん瑞々しくて美しいです。晩に私は、スープとカタリーネンプラム以外、口にすることを許されていません。12時前にベッドに就くことはほとんどありません。私が眠り込むまでにはまだ何時間もかかってしまうこともしばしばあります。そして翌朝7時には私はふたたび机の前で仕事をしております。」

ひとの出入りがあまりに多いことへの驚きについては、ルートヴィヒ・グリムがカッセルに住んでいる彼の友人の彫刻家ヴェルナー・ヘンシェルに宛てた1843年7月26日付けの手紙のなかでも記されている。「昨晩は、シェリング、プレーメン市長のシュミット、数人の枢密顧問官、教授たち、私の知らないご婦人方がやって来ました。ほかにどんなひとが居合わせていたのか私は知りません。バツティーナは毎

日とっていいほどやって来ます。時折、ここはまるでハト小屋みたいなもので、ひとが飛び出して行ったり飛び込んだりしております。見たところ私はここでは住めそうにありません。ヤーコブは、たいへん疲れている様子であります。が、ありがたいことに私が思っていたよりも元気に振舞っております。ヤーコブが仕事に没頭しすぎないよう願っております。」

ヴィルヘルム グリムの誕生日 (2月24日) は、身体の調子がすべてよければ、通常、知人を招待して祝うことになっていた。ヴィルヘルムがハノーファーにいる女友達のアンナ フォンアルンスヴァルトに宛てた1847年3月4日付けの手紙のなかで、誕生日の朗らかな様子を記している。「私の誕生日にダンスが行われたことは今回が初めてであります。晩になると若い方々も含めて多くの人々がやって来ました。そこでグステ (ヴィルヘルム グリムの娘) が誰か筋力のあるひとに頼んでフォルテピアノを運び入れ、ダンスの伴奏音楽を演奏することになりました。そしてヤーコブが突然、ピアノを弾いているグステの手を取り、流行遅れのワルツを彼女と踊ったとき、それはたいへん感動的なシーンでありました。」

ヴィルヘルム グリムの誕生日への学生の集い

ヴィルヘルム グリムは学生たちの間でたいへん親しまれていたもので、学生たちは彼を喜ばせようと誕生日に集まって催しを企画した。1842年2月24日の深夜零時に予定されていた当初の計画、「たいまつ音楽」(Fackelmusik) は実現しなかった。というのも、たいまつをもって町中を練り歩くことに対して警察の許可がおりず、ただティアガルテンのなかでのみ許されたからである。が、翌年にはうまく事が運んだ。その日の出来事をヴィルヘルム グリムは、1843年2月末に弟のルートヴィッヒに手紙で報告している。「私の誕生日祝いのパーティーが催されました。じつは私たちは誰一人として招待しなかったのです。が、私たちの多くの知人や友人たちによってこのようなことになってしまったのです。自宅の部屋はすべて来客で溢れてしまいました。・・・ひとびとは学生たちの目前で、彼らの歌を聴こうとしておりました。というのも学生たちが歌によって私たちに敬意を表するという、そのことがみんなに知れわたっていたからです。私たちの住居の管理人は、自発的

に家の前の通りを清掃しておりました。学生たちは、8時半にカンテラをもって家を囲むように半円となり立ち止まりました。木々の下に集っている姿は、おそらく町中で行われるよりもたいへん素晴らしく思われました。さて、歌声が起きました。私たちは来客とともにバルコニーのほうへ移動しました。学生たちは数週間、練習を積んでおりましたので、その歌は正確で素晴らしく、静寂さのなかで（馬車を学生たちはストップさせていました）あらゆる通りを突き抜けて澄んだ響きを帯びていました。通りに面する家屋の住人たちは窓を開けているか、あるいはバルコニーに出て聴き入っておりました。数曲歌われた後、学生の代表者が上がって来て、表題が金色で優美に書かれた羊皮紙を手渡しました。それには主として楽曲に乗せられた詩的な祝典の歌が記されており、またそれとは別に、ここで学んでいるノルウェー人によってデンマーク語で作成された文言が掲載されていました。代表団は、スイス人、オフエンバッハアム マイン出身のひと、またブラウンシュヴァイクのひとたちであり、三人とも全員、生き生きとした好感のもてる顔つきをしておりました。そのなかの一人が、私たちに対し、折り目正しいきちんとしたスピーチを行いました。それから私たちは彼らと握手を交わし、私たちはみなさん全員に対し公に返礼の意を込めてご招待したい、あらためて戻って来て私たちとともに晩を過ごして欲しい旨、感謝の意を表明しました。彼らは部屋を出ていったあと、さらに祝いの歌を歌い続け、私たちのために万歳が唱えられました。私たちは二人互いに彼らに向かってスピーチを行いました。さらに歌われたあと、学生たちはゆっくりと引き上げる姿勢をとりながら最後の一曲が灯りを消されて歌われました。その曲は、古き良き学生歌『それ故に我々は喜ばん』(Gaudeamus igitur) で、たいへん美しい印象を与えるものでした。」

この宴のさい、ヤーコプグリムは学生たちに対し次のようなスピーチを行った。「樹木が、樂しげにすくすく成長していたその母なる大地から引き抜かれ移植されるときは常に、それがどこか他の場所ですっかりと根付くようになるまでに相当な時間が必要となります。しかもかなり入念な世話や手入れがなされてはじめて、その樹木は、ふたたび育つことができるのです。私たち兄弟もまた、二度、故郷という大地から引っこ抜かれ、その痛手からすばやく立ち直ることができたわけではありませんでした。しかし、私たちは、ふたたびエネルギーを手に入れ、新鮮で潑刺

とした根を下ろす大地を見出したのでした。それが青年期の、その時抱いた愛の実現に向けての生涯と活動であります。それについて、諸君は、私たち兄弟にまさしく敬意を払って下さいました。私たちは、先ず初めに、原野を開墾しました。その原野は、決して最近のものというわけではなく、とっくの昔から存在しており、私たち自身のものだったのです。しかし、それを気に懸け心を配るひともおりませんでしたので、もはや価値がないものと見捨てられていたのです。

ドイツの古事を調査し研究するというのも、ギリシャ・ローマの古典の研究を押しつけようというものではないのです。ドイツの古事を研究するという意味は、それを通じて、ドイツの古き事柄に当然与えられてしかるべき正当性を主張し、それが追い払われた場所をふたたび手に入れること、その道理を支持しようということなのであります。私たちはさまざまな時代を経て来ました。かつて古典の研究が、私たちを守ることができなかつた時代もありました。古典研究によってはその苦難の時代を耐え抜くことはできませんでした。そこで、私たちの民族の本質とは何かという問いに目を転じ、そこに立ち向かっていったとき初めて、私たちは、苦境を乗り越えることができたのです。ドイツの古事に眼を向けることは、今後の様々な困難からも私たちを救い出してくれるのでありましょう。固有のもの、祖国に係わるものは、何かひとを強く元気づけるものをもっております。それは、今後ますます認められていくことと思います。ドイツの本質を問う探究は今や地歩を固めつつあり、今後いつそう裾野が広がっていくことでしょう。諸君がここに集い、示してくれた私たちに対する敬意の証も、そのことを明らかにしてくれます。さて、私は、私たちを歓迎する集いのために、まさに今日の日を選んでくれたことに、何にもまして感謝申し上げます。本日は、私がかつとも親愛している人物が地上に生を受けた日であります。私は、世界のどこを探し回っても、彼以上に親しみを覚える人物を知りません。」

続いてヴィルヘルムが以下のように述べている。「初めて私がこの地で諸君を前に語ることができた時、私は、私たちが諸君を信頼して歩み寄っていくにつれ諸君とのあいだに信頼関係を築くことができたなら、と願っておりました。私の願いは最上の形で実現されました。一年前には、私は重病で床に臥しておりました。その頃は、いつか再び諸君の前に立って講義をすることを望むことなど許されない状況で

ありました。当時はただ、生き長らえることを天に祈るのみでした。しかし同時に私は、多くのものを与えられました。今日諸君のなかにある心静かに、私たちに對する君たちの温かい心情の証しに接してうれしく思っております。私たちは諸君のその愛情を、たんに個人の生誕祝いに捧げられた証しとせず、私たちがこれまでいそしんできた研究に対する諸君の親愛の表明として受けとめる所存です。これらの研究は祖国をまるごと包括するものであります。すなわち、祖国にかんする研究は独特の魅力をもってあります。その固有の魅力というのは自国のものにはあらゆる面であらゆる面に備わっておりますが、他所の国のものでは、たとえそれがどれほど優れていようと置き換えることのできないものであります。

しかし、あらゆるものを生き生きとしたものに構成するドイツ古事学を探究するには、心を込めた地道に息の長い努力が求められます。それには熱中し感激する心が必要であります。その心を諸君はまだ抱いており、それでもってあらゆることをしっかりと把握するのです。それが諸君のような若き年代のもっとも美しい天性であります。来るべき時代は諸君のその天分や資質にかかっているものであります。その賜物がこれからも諸君から消えることのないように。学生時代に万歳！」

妨害された誕生祝賀パーティー

1844年2月24日に行われたヴィルヘルム・グリムの58歳の誕生日を祝う学生の集いは、残念ながらグリム兄弟にとってなんとも後味の悪いものとなってしまった。学生たちはその晩、ヴィルヘルム・グリムにたいまつ行列で祝意を捧げた。誕生日の朝、兄弟の古くからの友人ホフマン・フォン・ファーラー・スレーベン (Hoffmann von Fallersleben) がグリム兄弟の自宅を訪ねてきた。そこで兄弟は彼をその晩におこなわれる誕生祝賀パーティーと学生の集いに誘ったのであった。ホフマンは、彼の『非政治的な詩』という二巻本を刊行した廉で、ブレスラウ大学の教授職を解任されていた。他の招待客たちがバルコニーからたいまつ行列を眺めていたあいだ、ホフマン・フォン・ファーラー・スレーベンは隣室の控えの間に引きこもっていた。こうした状況のもと、彼が窓から外を見たとき、学生によって彼の姿が認められることになってしまった。そこで敬意を示す熱狂の渦がまき起こった。それに応えて

ホフマンは階下に降りて行き、学生たちに感謝の意を表明した。二日後、彼はベルリンから追放されることになった。グリム兄弟は、ホフマンはたいまつ行列が計画されていることをあらかじめ知っており、すでに誕生日の二日前にはベルリンに到着していた、そこでホフマンは、彼の党派に属する学生たちと打ち合わせていたのである、と主張した。というのも、グリム兄弟は、彼らをベルリンへ招聘してくれた国王フリードリッヒ ヴィルヘルム四世に対し、やっかいな立場に追い込まれるのではないかと思った。そこで、みずからが関知しているのではないかという嫌疑をこうむるのを避けるために、ホフマンと一線を画することにしたのであった。まさにそうした態度が、招待客を歓待する心情が欠如しているとして、多方面から遺憾に思われたのであった。いずれにせよ兄弟は、その釈明によって世論と相対することになり、しばらくの間、彼らの古くからの友人ベッティーナの機嫌をもそこなうことになってしまった。ベッティーナは完全にホフマンフォンファーラースレーベン側に立っており、それどころか政府に敵対する計画的な学生の集いについて彼女は前もって知っていたのではないかとの嫌疑さえかけられていたのであった。ヴィルヘルムグリムが書き遺した記録文書のなかで、彼自身によって「ホフマン事件」と名付けられたこの出来事は、いずれにせよ実に不愉快な結果をもたらした。この事件によってグリム兄弟は、あらためて公衆の面前に連れ出されたのであった。

『ケルニツシェツァイトUNG (Nr.61)』は、1844年3月1日付けの紙面でたいまつ行列にかんして次のように報道した。「ベルリン。2月25日。大学で学んでいる大勢の人々が昨日、グリム兄弟を祝したいまつ行列を捧げた。彼らは『ドイツの言語、習俗、法を生き生きとよみがえらせ、国家公民として高貴な信念を保ち続ける尊敬すべき人物』に万歳、と高らかに唱えながら行進した。ヴィルヘルムグリムは以下のような謝辞を述べた。『諸君！私は、諸君の示した友愛のしるしが私の兄や私自身をどれほど喜ばせるものであるか、諸君に対し改めて述べる必要はないと思います。が、兄は気分がすぐれないために姿を見せてないという点だけお知らせしておきます。私たちは心から諸君に対し感謝申し上げます。諸君はこの日を二重の祝祭日としてくれました。諸君が歌ってくれたことに感謝します。男性の胸から吐き出される歌の力のすばらしさを感じました。神は、今年、私に元気な日々を与

えてくれました。その健康なときを諸君のために役立てるよう私は努力いたしました。どれほどの喜びでもって私が諸君に対し講義していたのか、諸君はおそらく気づいていたと思います。私はドイツ古事学の研究に対する諸君の熱意を感じっております。対象物の相互関係や相互作用のなかに含まれているものに息を吹きかけること、蘇らせることは、生命を持つ言葉のもっとも美しい果実なのであります。私は諸君にすでに申し上げたことでありますが、ここでまた喜んで繰り返し述べたいと思います。それは、私たちは歴史の流れのなかではるか昔に滅亡した時代に連れ戻すために古事学を探究するのではないということ。私たちは現在を、私たちの諸力、愛や苦しみが帰せられるべき現在を真に見抜くこと、この認識を通じてさらに突き進んでいく、そのために古事学を探究する、ということであります。学識というのは遠方から人生を眺めるために格子垣の奥にとどまっているのではありません。私たちは、私たちを過去と結び付ける関連性を切れ味鋭いはさみで裁断するつもりではありません。私たちの言語が尊厳さを取り戻すこと、私たちの言語をそれに吊るされている外来の多彩に着色された布切れから解き放つこと、それはまさに諸君に、つまり未来に委ねられているのです。私たちは各々の国民に敬意を払いたいと思います。が、言語は私たちの心情の表現であり、その心根は祖国に捧げられております。諸君が言葉の十全の意味においてドイツ人であらんことを。さて諸君！私たちはあらゆることを学ばねばなりません。決して中断してはなりません。確かに諸君は今、知識を得るためにここにいます。そして諸君の熱心さや努力は自負してかまわないものであります。しかし、ここにいることは最終的なことではなく究極の目標ではありません。ドイツの大学は学問の息吹に触れる機会をもたらしてくれます。学問、それだけが人間の思考を混じりけのないものにし自由にしてくれるものなのです。そして、これが大学時代のもっとも純粋な目的なのであります。人間の精神が最初にその翼を広げてみた時期を懐かしみ、その喜びでもって人生の各々の時代を思わないものが誰かいるだろうか。この精神で満ち溢れた諸君全員に対し、私は喜んで祝福の意を表したいと思います。万歳！」学生たちは『それ故に我々は喜ばん』を歌いながら帰路についた。

1844年2月28日付けの『ドイチェ アルゲマイネ ツァイトUNG (Nr. 59)』は、上記の『ケルニツシェ ツァイトUNG (Nr. 61)』と同じようなまったく毒のない無

邪気な記事を書いていたわけではなかった。「ベルリン。2月25日。昨日の晩は或る祝祭によって記憶に刻まれることになった。その祝祭は確かに幅広い共感を得るものであった。昨日はヴィルヘルム グリムの誕生日であり、大勢の学生たちがたいまつ行列をすることによってその日を祝ったのであった。8時頃、参加者たちは大学の中庭に集合した。そこから隊列を整えて、赤々と燃えさかる数百本のたいまつをかざしながら、悪天候や厳しい寒さにもかかわらず大群となって有名な兄弟の住宅を目指し行進をはじめた。この学生たちの集団は、まっすぐにグリムの自宅に向かっていった。すなわち、ブランデンブルグ門へ向かうウンターデンリンデンを通過してティアガルテン近くのレネ通りへと進んで行った。そこにグリム兄弟は住んでいる。学生代表が住宅に入っていく、今夜の祝典の主人公に祝意を述べた。その間、階下の庭先では学生たちの歌声が響きわたっていた。ヴィルヘルム グリムは、代表団と一緒に家から降りて来て、学生たちのまっただなかへ歩み出てスピーチを行った。しかし、ヴィルヘルムの声は、葉のすっかり落ちた樹々のあいだを抜ける風のざわめきやこれだけの大集会にあっては避けることのできない騒音によって、ほとんど聴き取れない状況であった。そうしたなかにあっても、ひたむきで気品のある若者によって心のこもった感謝の念が示され、乾杯の辞が述べられた。偶々、たいへん有名な人物というわけではないが、それでも近頃たびたび話題に上ることの多いホフマン フォン ファーラー スレーベンが来客として祝いの席に居合わせていることがわかった。それゆえ、彼に対しても学生たちの熱狂的な祝福の声があがった。ホフマンもまた、グリムの傍に姿を見せて感謝の言葉を述べた。学生たちはグリム宅からその後エクサーシル広場へと移動していった。学生たちが大きな輪を作ったならば、通常、学生歌『それ故に我々は喜ばん』を歌い、たいまつを燃やし、そこでゲッティンゲンの七教授を褒め称えるため大声を張りあげるであろう。祝祭がこうした成りゆきになるとするならば、その際、有名な兄弟に対する尊敬の念がこうした行動を引き起こしているということは十分に想定できるとしても、このたいまつ行列の許可を得ることはきわめて難しかったことであろう。というのも、プロイセンでは政府側からみてゲッティンゲンの教授たちのとった行動は決して正当と認められるものではない、ということは周知のことであったからである。そして、誰もがこの件での政府見解を公にしたフォン ロコウ (von Rochow) 大

臣の通達、ときおり幾重にも古臭い儀式ばった言葉が用いられた次のような内容の通達をまだ覚えていた。『臣民は政府の行為に対して自らの偏狭な価値基準を繋げてはならない』。この点につき私たちの政府当局の見解が変更されたなどと聞いたためしがない。当局がサヴィニーやアイヒホルン、シェリングといったような人物と緊密な関係をもっているということは、彼らの政治的方針が、総じて彼らの厳密に学問的な熱意は彼らを完全に政治から引き離すわけではないという、あのゲッティンゲンの事件をめぐる当時人々が想定したものとは違ったものであることを示してもいる。さて、私たちは繰り返して述べよう。あの七教授のメンバーのうちの二人のために、たいまつ行列が期待されているとか、あるいは当局がそれを認可することなど、ほとんど難しいことであっただろう。どうやら、ホフマンフォンファーラーズレーベンが偶然に居合わせていたこと、そのことが結局、祝祭をあのような事態にしてしまったように思われる。たいまつを燃やし尽くした後、さらに学生たちの大部分はティアガルテンのなかにある屋台へ、つまりコーヒー店や飲み屋へと流れていった。本来ならティアガルテンで夜遅くまで学生たちが酒を飲み歩くことはないのであるが、それでもその晩は仲間との語らいや酔いに興じて遅くまで帰路に就くものはいなかった。」

この出来事には不愉快な後日談があった。ホフマンフォンファーラーズレーベンは、その翌日にベルリンから追放された。マイヤー博士 (Dr. Meyer) という人物も、申し立てによるとホフマンを称えたという嫌で四ヶ月半の城塞禁固の刑を宣告された。アルベルトティーデ (Albert Tiede) という学生も大学から追放された。

1844年3月6日、グリム兄弟は、『アルゲマイネプロイシッシェツァイトUNG』に次のような釈明文を公にした。「よそで出回っている新聞は、先のたいまつ行列にかんして間違った報道をすることに血眼になっております。それらの報道は矛盾し、話の辻褄が合わなくなってしまうのが私たちは一切構いません。ただ、明らかに真実に反する事柄は、論駁されなければなりませんし、また、誤謬は幾百もの証人の前では存立できるものではありません。つまり、ホフマンフォンファーラーズレーベンはヴィルヘルムグリムに導かれて学生たちのなかへ降りていった、というのは誤りであります。ヴィルヘルムグリムが学生たちの前でスピーチをしているとき、ホフマンはたんに或る学生代表だけに伴われてやって来て、そして部屋に

戻っていったにすぎません。その間、歌声は止んでおりました。そうした状況下で、ヴィルヘルムがスピーチを終えて初めて、突然、学生たちの隊列の外側で或る声が鳴り響き、『ホフマン万歳』というその祝意の声にその場に居合わせた人々全員が驚いたのです。この男と口をきいたひとは一人もいませんでした。私たちはそもそも彼がいつ到着したのか知りませんでしたが、ともかく彼はこのパーティーにやって来ました。彼も以前から知っていた誕生日を祝うつもりで参加したようにみえました。私たちのなすべきことは、彼を避けるということではありませんでした。というのも、彼は各方面から避けられていたからであります。私たちは個人的に彼とは1818年以来、旧知の仲でした。彼が私たちの願いを聞き入れて文学上の手助けをしたり、私たちに対してつねに共感の念を表していた頃から、ずいぶん長い年月が経っております。彼の飽くことなき勤勉さは、古代ドイツ文学の研究に多くの成果をあげ、本質的な進展をもたらしました。彼にふりかかった運命が悔やまれてなりません。しかし、彼に同情する気持ちは、彼の考え方や行動を弁護したり、正しいことと見做したりすることと結びつくものではありません。今度の件で彼は、時期的に具合の悪い客として私たちのもとにやって来たこと、しかも喜びをすべてぶち壊してしまったことを、みずから感じていることでしょう。しかし、これを機に、馬鹿げたことが起こっているように思われます。つまり、私たちがこれまで隠すことなく保持してきた私たちの政治的心情を公に表明するのにちょうど良い時期である、といった風潮が起こっているようです。しかし私たちは、政治的心情をいつでも、つまりその必要もないのに見せびらかせたり、軽率に世間にさらすことほど苦々しく思うものは他にありません。以前から私たちは、際限のない世上の話題にいつも私たちを巻き込まないでほしい、しかもそれは決して私たちの側ではなく、その相手側に肩入れされて話されるのであるが、そうした場面に私たちを引き込まないでほしい、と願っていました。どちらの側から噴煙があがるにせよ、党派のいざこざのなかには呼吸ができないのであります。私たちは平穩に仕事をすすめようと思うが故に、誰であろうとそうした私たちの生活を揺り動かそうとするものを認めるわけにはいかないのであります。研究するものが他意など抱かずに純粋な心情から敬意を示したことが、いわれもなく貶められるようなことがあれば、たんに私たちによってというだけでなく、ドイツの大学が今後永続するかどうか

かに関心を持つすべてのひとによって、痛烈に糾弾されるであります。

ヤーコプグリム ヴィルヘルムグリム」

この釈明文は数多くの新聞に公表され、これまで必ずしも兄弟二人に同調するようには検討されてこなかった。が、この釈明文のほかになお、長さは異なるが、ヴィルヘルムによって作成されヤーコプによってその原稿の欄外に注釈が書き込まれた第二の釈明文が遺品の中に存在する。仮にこの第二の釈明文が公表されていたならば、リベラルな新聞紙上に抗議文が殺到したことであろう。上記の第一の釈明文ですでに、事態はますます悪い方へと展開していった。もし兄弟が完全に沈黙を守っていたとすれば、あるいは状況はまだ良かったのかもしれない。1844年3月21日付けの『ケルニツシェツァイトゥング』は舌鋒鋭くグリム兄弟を批判した。他方、4月10日付けの『アルゲマイネツァイトゥング』は、グリム兄弟の立場を可能な限り正当に評価しようと試みる論評を発表した。しかし、その他の新聞で、兄弟を支持し擁護したものはごく僅かであった。というのも、兄弟は、彼らをベルリンへ招聘してくれた国王に感謝の念を示すことにあまりに執着しすぎており、他方、政治的にかくうわさのある彼らの古くからの友人ホフマンフォンファーラーズレーベンに対しては、彼らが国王に示す感情のかけらも示していないということが明瞭になった、というのであった。

当時、もっとも精力的に著作活動をしていた劇作家のカールグツコフ (Karl Gutzkow) は、グリム兄弟の釈明文に対して二つの辛辣な格言詩 (Epigramm) を創作し、彼らを嘲笑した。

1. グリム兄弟

私たちは、なるほど著作の中では、追放された教授を一再ならず引き合いに出した。が、私たちがケーキやお茶の席へ彼を呼び寄せたことは一切なかった。

2. 一度きりはものの数ならず

いったい永遠に門を叩き続けるつもりなのだろうか、祖国愛というやつは？
一度ははっきりと釈明したのだ、どうかもう私たちのことは構わないでくれ、と。

1844年3月5日、ヴァルンハーゲンフォンエンゼ (Varnhagen von Ense) は日記のなかで次のようにきわめて辛辣に記している。「ホフマンフォンファーラーズレーベンとたいまつ行列のさいに起こった彼に対する祝意の呼び声に関して、『シュターツツァイトゥング』に公表されたヤーコプとヴィルヘルムグリムの釈明文は、めそめそした憂鬱で腹立たしい呻き声だ！彼らは確かに、善良で誠実なひとには違いない。が、偏狭な精神、狭量な心情の持ち主であって、政治的感覚がまったく欠如している。彼らはゲッティンゲンでの名声に甘んじて安逸をむさぼっているにすぎない。そして、折悪しく彼らのその安逸のときを邪魔してはならず、放っておいてくれ、ということだ。彼らはその俗物根性をずいぶんと誇っている。なんと哀れな連中よ！」

少数の人物にあっては基本的にこの釈明文は好意的に受け取られた。彼らにとって、この釈明文は、仮にホフマンに関する表現（「招かれざる客」）とか大学をおびやかすといった二三の点で異なった見方があるとしても、全体として気品を備え且つ冷静に執筆されているという点ではほとんど一致していた。そうした人物、たとえばフリードリッヒヴィルヘルム四世、アレクサンダーフォンフンボルト、ランケ、サヴィニー、ダールマン、ゲルヴィーヌスといった人々は、完全にグリム兄弟の側に立った。ただベッティーナフォンアルニムだけは例外であった。彼女は兄弟を賞賛できず、公然とホフマンに味方した。つまり、政治的理由からというよりも純粋に人間的な理由から兄弟の態度に賛成できない、というのであった。というのも彼女の原則はこうであった。私はいつも抑圧されている者を心にかけて、その面倒をみなければなりません。ホフマンは何にもましてこうした原則があてはまる人物であり、彼はひどく自らを抑制しております。逆にそれだけいっそうリベラルな新聞各社は、彼を弁護しているのです。彼は『回想録』に次のように書いているだけである。「私はあらゆる機会に二人やその他の人々に対して、口頭や文書で表明していたようにその二人を敬愛していた。が、その二人の人間によって私の身の上になんかことが起こったことに私は驚き、辛く悲しい気分におそわれた。」

その件で誰よりもひどく悩み苦しんだのはグリム兄弟であった。彼らは当初、かんげんに沈黙を守ったほうがいいのかどうか決断がつかなかった。が、国王に対する配慮から公に釈明文を発表する必要があると思うようになった。この一連の出来

事が兄弟にどれほど嫌な思いをさせたかということは、ボンにいるダールマンに宛てた1844年3月15日付けのヤーコプ・グリムの手紙によって窺い知ることができる。

「ホフマンが、私たちのところで傍若無人で卑しく馬鹿な振る舞いをしてくれました。彼は、政府に対するうっぷんを晴らそうというさもしい満足感を得るがために、私たちとの友情をすべて台無しにしてくれました。この件で、新聞がまだ真実を語ることがなかったので、私たちは勇気を奮い立たせたのでした。自分の家で、解任されたひとりの教授を支持するたけになされたそのような示威行動に対し、私たちがそれに賛同するものではないということをまったく示すこと無く、されるがままに放っておくとしたら、それは私たちをプロイセンに受け入れてくれた国王に対する恩知らずの裏切りであるように、私たちには思われました。そこで私たちはまったく思いがけず、あたかも寝耳に水のごとくに、こうした争いに巻き込まれてしまいました。この争い事は、迫害されたりベラルな党派に理解を示している学生たちとの関係で私たちを傷つただけでなく、他の人々とも、とりわけベッティーナとのあいだに緊張関係をもたらしました。彼女とは考え方すべての点ではっきりとした違いがあり、ほとんど紛糾したような関係に陥っております」。ベッティーナとのこうした疎遠な状態は、だいぶ経ってから解消し、再び友好的な形を取り戻した。とくに、ヴィルヘルム・グリムの息子ヘルマン (Herman) とベッティーナの娘ギゼラ (Gisela) が婚約することになって後には完全に元に戻り、打ち解け合うようになった。

1844年3月22日、ダールマンが実地的確にこの事件にかんして意見を述べている。その手紙の中に次のような記述がみえる。「私には何も言葉が出てきません。親愛なる友よ。どうしてまた貴殿のうえにこうした厳しいあらしが吹き荒れることになってしまったことか、しかも、よりによって厳かな心地よい祝典の真っ最中に起こるなんて、それを思うと私にとってどれほど辛く悲しいことか。すべての事柄が間違いなく私たちすべてを傷つけております。そして、私たちがそのことを話題にしない日はなく、そのように日々が過ぎ去っております。ところで愛するヤーコプよ、貴殿の手紙は、私たちに今度の件で悩みぬいた貴殿の心情を私たちの心に響くやり方で理解させてくれました。このところ私は何度、貴殿のところに駆けつけていきたい、と思ったことか。新聞にこの件で一言、寄稿することができるかど

うか、という思いが何度私の頭をかすめたことか。とはいえ私は、不幸な事態がさらにひどくなってしまうことを恐れていました。私は良い方策を見出しかねておりました。・・・私は、この件での自分の見解を、おそらくそれは貴殿の考えときっと同じでしょうが、押し隠したくありません。その間、押しつけがましい忠告者や助言者がじゅうぶんにやって来たことでしょう。彼らは、先ず激した不愉快な事柄をいくらか静めさせる代わりに、ただちに、なにか表明することは避けられないとみている連中です。しかし、とにかくグリム家の人々を知っている者は誰も、彼らの言うことを信じないでしょうが。彼らはそうした機会を、というも彼らに然るべき敬意が示されることになるので、或る政治的示威運動に利用しようとしたのでしょう。その他の点では、私は心配してないのですが、このあらしは、まもなく静まることでしょう。貴殿は弟とともに、祖国の世論のなかにたいへん立派な基礎を築いてこられたので、貴殿の友人がまったく沈黙することで自信を失うことはありません。」

グリム兄弟は彼らの微妙な立場にあって、友人から見放されていると感じていたであろう。が、兄弟は、友人のうちの誰かは公に兄弟を支持してくれるであろうという希望を持っていた。兄弟はとくに、彼らの古くからの友人で同志でもあったダールマンにそれを期待した。1844年4月13日付けのゲルヴィーヌスに宛てたヤーコブの手紙から、それを読み取ることができる。そこには次のように記されていた。

「ダールマンはみずからの立場で考えております。偶然、不快きわまる文書が、ケルンの彼のごく身近で出回るようになったということです。私は、現状以上に良くなるとは思いません。そして彼は多くの点で私より優っているかもしれませんが、もし私が彼ならば、私は、その文書をベルリンへ届けることなどせず、さしあたって私の釈明文をもちだすこともせず、中傷された友人や仲間の側に歩み寄るでしょう。そして、ワシのように雄々しく、私はカラスを目指して突進したでしょう。その際、そうした行為から私にとって良い結果が見込めるのか、あるいは悪い結果になるのかなどと考量することなどなかったでしょう。私なら、共にゲッティンゲン、ライプツィヒ、イエナ、ボンへ厳粛な気持ちで赴き、並んで会議の席についた人物を侮辱されたまま放置などしなかったでしょう。その感情は彼の胸の内にも起こっていました。彼はただ息をひそめるだけでした。彼が私を救うことがないと

したら、いったいどのような友人が私に力を貸してくれるでしょうか。」

ゲルヴィーヌスはこの指摘は的を射ていると感じた。そして彼自身この争いに介入するつもりであったが、怒りを抑えることができないのではないかと恐れから、このもめ事に関与することを断念した、と説明した。彼はまた、グリム兄弟に対し、兄弟の友人とくにサヴィニーとベッティーナには注意するよう諭した。「私は、サヴィニーやベッティーナが貴殿に反対の態度をとっているという新聞報道が事実であってほしい、と神に祈っており、また、貴殿には、なまぬるく微温的な、それでいて気性の激しいすべての友人を身震いさせるほどのひとであってほしい、と願っております。彼らは貴殿の実直な心情にふさわしくなく、貴殿の誠実な性格を正当に評価し理解することに欠けております……。ヤーコブは、ゲルヴィーヌスのこの提案を実行することには賛成できなかった。彼は、1844年4月13日、次のように返事を書いた。「サヴィニーは、ここベルリンでは私たちのもっとも古くからの友人であり、何事にも私たちにに対し友好的であります。この事件に際して、彼は、みずから非難されるような行動は、一切とっておりません。ベッティーナについても、彼女とはほとんど40年前からの知り合いであります。それで、彼女との交際を断ってしまうことは、きわめて不自然なことと思われます。彼女と付き合うなかで、私は、ときおり不快に思うこともありますが、他方、彼女の非凡な精神を高く評価してもおります。貴殿は彼女のその精神に対し、概ねしかるべき正当な評価を下しておりませんし、時折あきらかに間違った評価をしております。現実の生活において精神は、たくさんの不合理な点や見当違いがある書物の世界よりもより強烈に現れるものであります。そうしたものを私は一瞬たりとも好みません。今、彼女は実際、私たちに対して誤解をしているように思われます。それが私たちと彼女との仲を裂いているのかもしれない。」

ヤーコブグリムとホフマンフォンファーラーズレーベンとは後に和解した。ホフマンの或る手紙に対し、1852年6月24日付けでヤーコブは次のように返答している。「貴殿に対するかつての恨み、私たちのあいだを隔てていたものを時折、悔やんでおりました」。しかし、ヴィルヘルムのほうは、生涯、ホフマンと和解することはなかった。ハノーファーにあるランプラー書店 (die Rümplersche Buchhandlung) が1852年、ホフマンの委託を受けてヴィルヘルムに人名小辞典を送り届けた

とき、ヴィルヘルムはその本をにべもなく送り返し、以後いつさい、彼からの寄贈本を送付しないよう請うたのであった。

今日、私たちが公平な立場で賛否の声を検討するならば、グリム兄弟を、大部分の新聞がそのような見解をもっていたように、性急で軽率な行為をした、と非難することはできない。兄弟は、心の奥底にある信念、つまり彼らの性格の根本的特徴である誠実さそのものに基づいて行動した。兄弟はそこから必然的に出てくる結果に心を用いた。すなわち、彼らは、兄弟を追放の身から救い出してくれたプロイセン国王に対する彼らの政治的信念と恩義のために、政治的世界が兄弟とは異なる旧友ホフマンフォンファーラーズレーベンを犠牲にしたのであった。まさに兄弟のその点が、リベラルな新聞によって追及されたのであった。いったい、兄弟にとって他にどのような行動をとりえたであろうか。兄弟の弁明へ向けた試みは誤って解釈され、彼らにとって、ほとんど命取りとなってしまった。ひとは彼らに責任無く生じてしまった状況に対して理解を示すのではなく、やみくもに彼らを攻撃し、公然と、裏切り者とか客を歓待する道理に悖る行為をしたという廉で兄弟を咎めようとした。しかし、ホフマンフォンファーラーズレーベンは、彼に対し明らかにきわめて厳しい処分をした政府に対するうっぷんを晴らすために、客として待遇される権利 (Gastrecht) 毀損のもとで、純粹に反骨精神に基づいて行動した。しかし、グリム兄弟に分ち与えられた名誉を自分の目的のために利用するという権利は、ホフマンにだってなかったであろう。彼が群衆の中に姿を見せると、彼に対し、つまり謹厳な教授に対して歓声があがるということに、ホフマンは十分に慣れていた。

ちなみに、気まずくてやりきれないこの事件がやがて忘れ去られて後、兄弟を敬愛する兆し、兄弟を敬慕する表現に欠けるということにはなかった。もちろん学生の側からも敬愛の証が示された。さらにまた、グリム兄弟は国民の誇りであるということで、彼らの名前は深く浸透し、国民の意識にのぼるようになっていった。